

# フランスの女性労働に関する 社会経済史的考察

—— 19 世紀後半から 1914 年まで ——

廣 田 愛 理

## はじめに

美術史と経済史の領域を融合させることで、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのフランス社会の全体像を描きなおすことはいかにして可能となるか。この研究は、社会経済史的文脈で絵画や写真といったイメージの背景に広がる世界を解明することを目的とする。そうした作業は、当時のフランス社会を再検討することにつながっている。手始めとして、ここでは当時のフランス社会における女性のあり方に焦点を絞り、女性労働の歴史的形態を検証する。

一例として、1905 年にレオン・ドラショー (1850-1919)<sup>1)</sup> が描いた作品を取り上げてみよう (図 1)<sup>2)</sup>。穏やかな様子で縫物をしているこの女性は、一見すると家の中で家族の衣服を繕っている母親のように思われる。しかし、「Lingère」という作品のタイトルが示すように、彼女は下着の縫製を生業としており、工場や工房ではなく自宅において家内労働という形態で働いていることがわかる。さらに、室内のくすんだ色とは対照的に下着は純白である。ここから、彼女が縫っているのが庶民の日常的な肌着ではないと推測できるだろう。彼女が既婚者か未婚者かはこの絵から判断できないものの、(室内に不自然に装飾が多いとはいえ) 質素な室内の様子から、この労働が彼女の生活を支える重要な収入源であったと推察される。

これは特殊な場面を描いたものなのだろうか。それとも、当時の女性の一般的な姿なのだろうか。以下では当時の女性労働の実態解明を通じて、この絵の女性を取り巻く環境がいかなるものであったのかを概観する。



図1 Léon DELACHAUX, Lingère, 1905, Huile sur toile, 47 × 56.5 cm, Musée d'Orsay.

## 1. 働く女性はその程度いたのか

当時の女性労働者の正確な数を把握するのは難しい。統計資料の信頼性の低さも一因ではあるが、それに加えて、当時の社会では家庭人としての女性の活動が職業活動よりも重視されており、勤労女性の数の把握は国家にとって重要ではなかったからである。とはいえ、当時の社会において女性労働者がどの程度いたのかを大まかに理解することは無意味ではなかろう。

フランスで労働力人口と非労働力人口という概念を導入したのは1896年の人口調査である。この調査によれば、女性の労働力人口は全女性人口の3分の1を占めており、それは全労働力人口の34.6%（638万2658人）に相当した。とりわけ女性の割合が多い分野は、布地・衣服 Travail des étoffes, vêtement（87.1% = 113万5553人）、使用人 Service domestique（81% = 73万1523人）、繊維産業 Industries textiles proprement dites（51.4% = 46万3217人）、自由業 Professions libérales（41% = 13万8460人）、商業・興行・銀行 Commerce, spectacle, banque（35.6% = 57万1079人）であった<sup>3)</sup>。

実数の上で女性労働者数が最も多いのは農林業 Forêts et agriculture であり（32.7% = 275万4593人）、女性労働者の4割強が従事していたことになる<sup>4)</sup>。19世紀半ばのフランスでは工業化の進行によって農業就労人口が減少

表 1 農業世帯人口の推移

	総人口（百万人）	農村人口（百万人） （総人口に占める割合）	農業世帯人口（百万人） （総人口に占める割合）
1801 年	27.5	21.2 (77%)	18.2 (66%)
1821 年	30.5	23.4 (76%)	18.9 (62%)
1846 年	35.4	26.8 (76%)	20.1 (57%)
1861 年	37.4	26.6 (71%)	19.9 (53%)
1872 年	36.1	24.9 (69%)	18.5 (51%)
1881 年	37.7	24.6 (65%)	18.2 (48%)
1891 年	38.3	24.0 (63%)	17.4 (46%)
1901 年	38.9	23.0 (59%)	16.1 (42%)
1911 年	39.6	22.1 (56%)	15.1 (38%)

出典：Jean Molinier, « L'évolution de la population agricole du XVIII<sup>e</sup> siècle à nos jours », *Economie et statistique*, n°91, Juillet-Août 1977, p. 80.

傾向に転じた。とはいえ、世紀転換期でも依然として人口の 4 割以上が農業世帯であり、農村人口も全人口の 6 割を占めていたから、女性労働者の多くが農村を活動の場としていたことはいうまでもない（表 1 参照）<sup>5)</sup>。

このように、多数の女性が多様な仕事に従事していた。女性労働の特徴は、結婚や出産といった人生の節目に応じて変化することにある。初等教育は 1867 年に無償化され、1882 年に義務化された。とはいえ、女子は幼いころから家庭内の仕事を手伝う重要な労働力と見なされていたため、定期的には学校に通わなかった。労働可能な年齢になると工業労働者や使用人としてフルタイムで働きに出かけ、結婚して子供が生まれると多くの女性が仕事を辞めた<sup>6)</sup>。女性が結婚後に工場や工房での賃金労働に復帰するケースもあったが、それは、夫の病気や失業といった非常事や寡婦となった場合である。男性を中心とする当時の社会において、女性の賃金労働が認識されていたのは、こうした結婚前の一定期間か結婚後の緊急時のみであった<sup>7)</sup>。

しかし、女性が結婚を機に仕事を辞めたからといって、それは専業主婦になったことを意味しているわけではない。家庭に戻った後も、多くの女性は家内労働の形で働き続け、家計を支える収入を得ていた。すなわち 1896 年の調査の問題点は、主婦を労働力人口に算入してない点にある。主婦と自称

しながら、夫の仕事を助けたり家事の後に刺繍やレースなどの内職をしたりする女性の収入は、夫の収入に計上されるため、こうした女性労働者は統計には表れない。家内労働に従事する女性の数については、様々な推計が出されているが、下は80万人から上は150万人までと、その数値は一定していない。シュヴァイツェルも指摘するように、家内労働は「非合法的な女性労働の現場<sup>8)</sup>」であったから、正確な人数の把握は不可能である。しかし、工場労働に従事しながら労働時間外に家内労働に従事する者や、複数の仕事に従事していた者を差し引いても、100万人前後の女性が家内労働という形態で仕事をしていたと推測できるだろう。つまり、相当数の女性が幼少期より、従事する仕事を変えながらも常に働き続けていたのである<sup>9)</sup>。

## 2. 家の外で働く女性

19世紀以前においては、主に服飾部門で下着製造・刺繍・ニット製造などの職人として自立した女性がわずかながら存在した。しかし、多くの女性は自立の手段を持たなかったため、農村の日雇い労働に従事したり、縫い物や編み物をしたり、菜園で育てた農作物を市場で売ってわずかな収入を得たりしていた。町では、乳母として職人や商人の家庭の子どもを育てたり、小さな店を営んだり、行商、洗濯屋などの仕事をしたりする女性もいた。こうした女性の仕事は、19世紀に入っても存続した。しかも、1人の女性が複数の仕事を掛け持ちする場合もあった<sup>10)</sup>。

とりわけ乳母という仕事が、裕福な家庭の住み込みの形態に限定されず、庶民の子どもの世話をする形態でも存在したことは注目に値する。このことから、子供がいる家庭において、女性たちは他人に子供を預けてでも仕事を続けなければならない状況にあったことがうかがえる<sup>11)</sup>。

他方で、上記のような18世紀から存続する仕事に加え、19世紀には工業化の進展に伴い、とりわけ繊維工場で女性の労働力が必要とされるようになる。このことは、単に工場労働という新しい形態の仕事が登場したことを意味するだけではない。紡績などは、従来、女性が家庭内で行ってきた仕事であり、そうした女性の仕事が機械化の対象となったことで、女性たちは工場に働きに出ざるを得なくなったのである。経営者にとって、機械化による仕事の単純化は、男性の半分の賃金で雇える女性や子供を使用した製造コストの削減をもたらすものとして魅力的であった。さらに、19世紀半ばになると、機械化が進んだ製紙業や、甜菜を原料とする製糖業、高級陶器製造業、缶詰

製造業など、繊維産業以外の新たな産業部門にも女性が進出し始めた<sup>12)</sup>。

小規模農家、農業労働者、工場労働者の家庭では、農場や商店やブルジョワ家庭の使用人として自分の子どもを送り出すことは古くからの慣行であり、こうした慣行は両大戦間期まで続いた。とりわけ娘を使用人として送り出す家庭にとって、使用人の仕事は工業労働者よりも好ましく、結婚準備に適していると見なされた。家の中での仕事であるため、地方出身者の娘が大都市の危険から守られるだけでなく、結婚の際の持参金を貯めると同時に家事の知識を身につけることができると考えられた。また、工業労働よりも給金が高いことも魅力であった。雇用環境による差はあったものの、上流階級の人々と接することで身につけた教養・身だしなみ・礼儀作法は、結婚による社会的上昇に有利に働いた。実際に使用人の大半が結婚し、その3分の1は社会的地位が自分よりも上の男性と結婚したとされる<sup>13)</sup>。

とりわけ世紀転換期には、新興の小ブルジョワ家庭が社会的ステイタスを誇示するために使用人を求めた。しかしながら、貴族や大ブルジョワのように男女の使用人を複数雇うほどの資金力を持たなかった小ブルジョワ家庭では、“domestique（使用人）”ではなく、“bonne à tout faire（なんでもできる女性＝女中）”の需要が高まったため、使用人という職種に女性が増えることになった<sup>14)</sup>。

### 3. 家内労働に従事する女性

工業化の進展に伴い工場労働者が増加したとはいえ、女性については家内労働従事者も依然として多く、とりわけそれは服飾分野で顕著であった。すなわち、工業化による生産拡大の過程で機械化されずに残った仕事や、機械化が遅れた仕事の需要が家内労働の形で増加したと考えられる。

家内労働者は製造業者や下請け業者の注文を受けて家で仕事をする者を指すが、製造業者のために仕事をする手工業者との区別は曖昧であった。また、同じ仕事内容であっても、アトリエに出向いて作業をすれば家内労働とは見なされないため、家内労働であるかどうかは職種によって規定されるわけではない。何年もの見習いが必要な高度な刺繍やレース編みをする家内労働がある一方で、ボタンホール作り、首飾りの紐遠し、帽子の飾りつけ、傘の仕上げ、あるいは、カルトナージュと呼ばれる厚紙箱作りなどの比較的簡単な家内労働もあった。また、刺繍やレースなどは女性が一人で行う家内労働であったが、家内工業に従事する夫や職人の夫を手助けする場合も家内労働と

見なされた<sup>15)</sup>。

女性の家内労働が低賃金で労働条件も悪かったにもかかわらず存続し続けた背景には、女性の最も重要な役割を子育てを中心とした家事労働に求め、自宅で「自由に働ける」家内労働を理想的な労働形態と捉える当時の社会規範があった。とりわけ、家庭における母親の重要性を強調するキリスト教徒や、労働市場への女性の参入による競争激化を危惧するサンディカリスト、働きに出る妻を心配する夫にとって、女性を家で働かせることは好都合であった<sup>16)</sup>。

実際、造花製造に従事する女性を対象とした1913年の労働局調査によれば、家内労働は、自らの裁量で休みを取りながら働きたい高齢女性や子供の世話の傍らで働きたい女性にとって理想的であった。しかし、実態としては、深夜まで仕事を強制されること、工房よりも賃金が安いこと、仕事がない期間が頻繁にあることに対する不満も聞かれた。経営者が重宝するほどの技能の持ち主でもない限り、3カ月以上仕事がなかったり、繁忙期に1日20時間近い労働を強いられたりすることもあった。しかし、経営者の側は、自宅で働きたいという女性の希望を聞き入れて工房での労働を家内労働に切り替えたと主張していた<sup>17)</sup>。

家族の扶養を男性の役割と見なす当時の風潮の下で、夫の収入が不十分であったとしても、女性は生産性の低い「不完全な労働者」であり、妻の労働は夫を補完する二次的なものとして軽視されていた。すなわち、女性の家内労働は、家事労働と家族の手助けから派生したものである。スコットも述べているように、「父親の賃金が家族の生存を保障しているのだから、父親の賃金のみが重要であった。母親の家事労働と、彼女の収入は、大した意味をもってはいない。すなわち、女性たちの生産は、現実の経済的価値をもたない」<sup>18)</sup>。しかし、実態として、夫の収入だけでは生活できない家庭においては、妻が長時間の家内労働に従事するがゆえに子どもの世話を十分にできず、子どもさえも重要な労働力と見なされていた。当時の農村住民や都市の労働者家庭において、家庭を守る母親像が、いかに現実と乖離した理想論であったかが理解できよう。さらに、家内労働は貧しい家庭のみで行われていたわけではない。困窮状態を悟られることは恥だと考える小ブルジョワ家庭にとって、家内労働という隠れた労働形態は好都合でもあった<sup>19)</sup>。

低賃金で家内労働に従事する女性は、衛生状態の悪い住宅内で長時間の労働を強いられるため、健康状態が悪く、母親の健康は子どもの健康をも脅かす危険性があった。職業により様々な病気や怪我のリスクが存在し、例えば、

造花製造で使用する染料や羽毛はアレルギーを、アセトンとセルロイドは化学物質過敏症を引き起こした。換気の悪い部屋での作業はアニリン中毒の危険を伴い、針を使う仕事においては、指を刺すことで頻繁にひょう疽に罹患した。しかし、こうした職業上のリスクにもかかわらず、家内労働における怪我や病気は労災補償の対象外であった。当時、女性労働者の死因として一番高かったのは「民族の衰退」をもたらす国民病と恐れられた結核であった。ブルジョワ階級の間では、家内労働で働く女性たちの作る洋服や菓子が伝染源と考えられていたため、よりよい衛生条件の下で作られた製品の購入が危険回避につながると力説された<sup>20)</sup>。

#### 4. 女性の労働と資格

家内労働に従事する女性のうち、結婚している者は半数であり、残りは独身か寡婦か離婚した者であった。とりわけ家内労働を唯一の収入源とする単身の女性にとって、その賃金は低く、長時間労働を余儀なくされた。もっとも、当時、長時間労働は家内労働に限られず、監視の目が届かない家族経営の工房なども同様の状況であった。女性たちは低賃金を埋め合わせるために超過勤務をせざるを得ず、経営者側もそれを黙認していた<sup>21)</sup>。

女性の仕事の多くは、基本的に家庭内で母親から、あるいは修道院で習った手仕事の延長線上にあり、職業訓練によって修得したものではない（図2参照）<sup>22)</sup>。実際には、刺繍やレースなど、高度な技術を必要とする仕事があったとしても、基本的に女性の仕事は誰にでもできるものと社会的に認識されていた。このように、女性労働の多くが職業資格に基づくものでなかったことが低賃金で搾取される原因となった<sup>23)</sup>。

例えば、衣服の製造に関しては、男性が上着を作り、女性が下着を作るという分業が成立していた。男性服の仕立てにおいては、男性テーラーが華やかな作業を独占し、女性にはチョッキの仕立て、ミシン縫製、寸法直しなどの周回的な作業が与えられた<sup>24)</sup>。農村においても男女の仕事には分業が見られ、レース編みは専ら女性の仕事であったが、機織りの場合は女性と子供は男性の補佐役であった<sup>25)</sup>。すなわち、道具が大型化すると、仕事が男性のものとなる傾向が見られた。

ゆえに、女性の仕事であったレースや刺繍も、機械化されると主導権は男性に移ることになる。性別間の分業は、1880年代に高度な機械が導入されたことによって強化され、男性が機械の操作を占有した。機械が女性に委ね



図2 Mary Lancaster Lucas, *Petites dentellières*, Huile sur toile. Exposé au Salon des Artistes Français de 1907.

られる場合は、針仕事の延長線上にあるミシンのような単純なものとなる。確かに、機械化は、仕事の単純化をもたらし、経営者が賃金の安い女性労働力に頼ることを可能にしたため、男性の仕事に女性の参入を許し、従来男性のものであった職の格下げをもたらしたと受け止められたが、機械化によって女性の仕事が男性化する側面も見られたのである。

こうした女性の手仕事の男性化は、19世紀前半にイギリスから導入された機械によって機械化が開始したカレーのレース産業において確認される。(図3)に見られるように、伸縮写図器で図案をなぞりながら右手でハンドルを操作しているのは男性であり、2人の女性がその横で補助的な仕事をしている<sup>26)</sup>。同様に、普仏戦争後にスイス製機械の導入によって機械刺繍産業が栄えたコルド＝スュル＝シエルでは、機械を操作する男性の刺繍職人(brodeur)の傍で女性の糸通し職人(enfileuse)が刺繍糸の準備をした(20世紀初頭に糸通しは機械化される(図4))。彼女らは、修道女から仕事を教わり5、6歳からこの仕事に従事した。さらに、完成した製品は、検品の後、刺繍が欠けている部分や刺繍職人によるミスが見つかったと手作業かミシンで繕い職人(raccommodeuse)と呼ばれる女性たちによって修繕された。この作業は、製品の評価を左右する非常に重要な仕事であった。また、布の裏側の不要な糸を切ったり、透かし模様が入る場合に不要な布を切り取ったりする手作業は糸切り職人(découpeuse)の仕事であった。製品にアイロンをあてるアイロンかけ職人(repasseuse)や、4.2メートルのスカラップレー

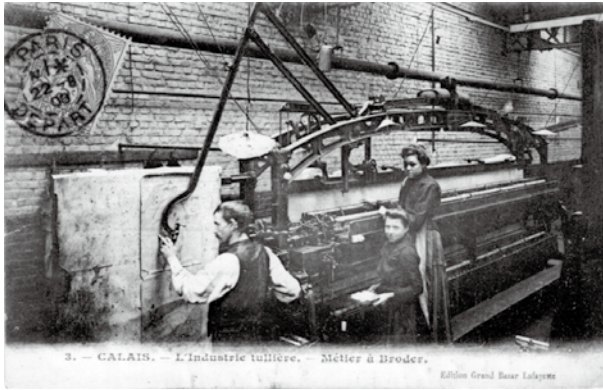


図3 カレーのチュール製造業(絵葉書、1908年消印、筆者私物)



図4 糸通し機(左)と刺繍機(右) Musée de la Broderie, Cordes sur Ciel (筆者撮影)

スのテープを 20 センチメートル幅の紙箱に入るように折り畳む者 (plieuse) もいた<sup>27)</sup>。工房における雇われ刺繍職人の場合、1 日あたり 4.20 フランの収入から糸通し職人の賃金を差し引いた約 3 フランが手取りであった。家内工業を営む刺繍職人の場合、糸通し職人に 1 日 1.25 フラン、繕い職人に 1.75 フランを支払い、約 7.60 フランの手取りであった<sup>28)</sup>。つまり、高い技術を要する繕い職人の女性と刺繍職人の男性との間には、2.5 倍から 4 倍以上の賃金格差があった。

トロワのメリヤス製品製造業の例では、手工業の段階から工房内で性別による分業が行われていたが、工業製造に移行しても分業は引き継がれた。1888 年に男子のみに限定された職業学校が創設されると、男性労働者と女性労働者の間の分離は強化された。その間、女性は家庭内で手仕事の技術を身につけ続けた。それゆえ、若い男性は技術者や職工長になるが、女性はいかなる昇進の可能性もない職に閉じ込められた。女性の作業の重要度が決して低かったわけではなく、女性は緻密な仕上げ作業を担っていた。しかし、女性がどんなに熟達した腕前を見せようとも、「非公式の形」で修得された技術は資格としては認められず、それは「女性特有の器用さ」という性質に結びついたものと見なされた。しばしば家庭内で行われたこれらの仕事は、出来高払いであり、キャリアアップにはつながらなかった<sup>29)</sup>。

このように、性別による分業や女性の資格が認められないといった事实は、労働運動が男性によって支配されていた当時、批判の対象となることはほとんどなかった。女性が低賃金であるのは男性よりも生産性が低いためだとされ、男女賃金の不平等も問題にはされなかった。むしろ男性労働者は、労働組合組織において、性別による分業と労働市場における女性の過小評価を通じて男性による家父長的支配を維持しようとした。男性にとっては、自分たちの特権を保持するために女性に家庭内労働を割り当てることが好都合であり、1914 年以前において、労働組合は一般的に女性の工場労働に反対する立場をとっていた<sup>30)</sup>。

## 5. 1892 年法と女性労働

フランスにおいて労働を規制する最初の法律は 1841 年法 (Loi du 22 mars 1841 relative au travail des enfants employés dans les manufactures, usines ou ateliers) であり、これによって最低雇用年齢を 8 歳とすること、8 歳から 12 歳は 1 日の実働労働時間を 8 時間以内、12 歳から 16 歳は 12 時間以内と

すること、13歳未満の児童の夜間労働の禁止などが定められた<sup>31)</sup>。次いで1874年法(Loi du 19 mai 1874 sur le travail des enfants et des filles mineures employés dans l'industrie)において、児童労働の制限が拡大され、16歳未満の子供と21歳未満の女子に対する夜間労働の禁止や、16歳未満の子供と21歳未満の女子の日曜・祭日労働の禁止、12歳未満の子供および少女・女性の炭鉱・採石場での地下労働の禁止が規定された<sup>32)</sup>。

さらに、「工業施設における児童・女子・女性に関する1892年11月2日法(Loi du 2 novembre 1892 sur le travail des enfants, des filles et de femmes dans les établissements industriels)」において女性労働が法律で規制されることになる。同法は、児童・未成年女子・女性の工場・鉱山・採石場・作業場における労働について規定しており、以下の通り定められた。①13歳未満の児童を上記の施設において働かせてはならない(第2条)<sup>33)</sup>。②16歳未満の男女の1日の実働労働時間は10時間を超えてはならず、16歳から18歳の男女の実働労働時間は1日11時間、週60時間を超えてはならない(第3条)。③18歳以上の女性の実働労働時間は11時間を超えてはならない(第3条)。④18歳未満の子どもと未成年女子および女性は夜9時から朝5時までの間の夜間労働に従事させてはならない(第4条)。⑤18歳未満の子どもとすべての女性を週6日以上働かせてはならず、祭日も働かせてはならない(第5条)。⑥少女と女性は鉱山や採石場における地下労働に従事してはならない(第6条)。⑦女性・少女・児童を不衛生または危険な施設で働かせてはならない(第13条)<sup>34)</sup>。

1892年法は女性を保護する内容ではあるものの、同法を厳格に適用する要求は、女性が男性の競合相手となる分野において、女性を排除する手段として機能し、結果的に男女間の仕事の分離を強化した。すなわち、男性労働者は女性が賃金の高い男性の仕事にアクセスすることを望まず、他方で、コスト削減のために安価な女性労働力の利用を進める経営者に対して、労働組合はこの法律を盾に男性の職業領域において女性の雇用を制限するよう訴えた<sup>35)</sup>。

他方で、1892年法は、家内労働の拡大と女性の搾取の契機ともなった。すなわち、同法は工場などの施設における女性労働を対象としていたが、適用外となる自宅というプライベート空間では労働がむしろ強化された。フランスでは、19世紀末に家庭にミシンが普及し始めたことにより、女性がより多くの仕事を自宅でこなすことができるようになった<sup>36)</sup>。多くの家内労働者の女性にとって、当時、ミシンは1年分の賃金に相当したが、女性たちは自宅でより速く仕事をするためにミシンを購入した。一部の経営者は、女性

の深夜労働を禁じる 1892 年法を掻い潜るために女性労働者にミシンを貸し出し、自宅での持ち帰り残業を強いた<sup>37)</sup>。すなわち、ミシンの導入により、労働環境は改善されるどころか、逆に賃金を低下させる結果となった。ミシンを所持しないことがさらに賃金を低下させることになったので、生活のためにミシンを所持することが必須となり、いわゆる機械化貧乏の状況も生じた。ミシンを持たない女性労働者は、隣人のミシンを借りて仕事をしなければならなかった<sup>38)</sup>。

## おわりに

当時のフランス社会においては就業可能な女性の大部分が何らかの労働に従事していた。だが、工業化の進展に伴い、工場労働に従事する女性は増えたとはいえ、女性が外で働くことは望ましいことではなかった。なぜなら、女性の最も重要な仕事は家事と育児であり、家族の扶養は父親の役割であったからである。それゆえ、外に見えない家内労働が女性労働の形態として好まれた。すなわち、妻の収入は、夫の収入が家族の生存を支えているという体面を保つためにあり、夫の収入を補助する以上の意味をもつべきではなかった。こうした考えに基づき賃金が設定されたため、既婚、未婚を問わず、女性賃金は低かった。レースや刺繍産業の例に見られるように、女性が極めて重要な仕事を担っていたとしても、女性の賃金は常に男性よりも低く、それは女性特有の生産性の低さに起因すると解釈された。

1892 年法が女性労働者を保護する意図を持ちながらも、結果的に家内労働を拡大させる契機となったことは、当時の労働需要の高まりと、多くの女性が働かずに生活できなかった実態を物語っている。当時の男性中心社会において、女性たちに職業資格を持つ術が与えられなかったことは、コスト削減を求める雇用者によって経営戦略上、有利に利用された。

外で働くにせよ、家内労働に従事するにせよ、女性の劣等性を主張する当時の社会において、女性の多くは労働の正当な対価を得られなかった。そのことが一層彼女たちに劣悪な環境での長時間労働を強いる結果となり、「家庭を守る母親」という当時の社会的理想を実現できないという矛盾した状況をもたらしたのである。

注

- 1) 1850年にスイス人の父、フランス人の母のもと、時計職人の家に生まれたドラショーは、幼少期をスイスで過ごす。父の自殺後、1859年に家族とともにカイロに移住するが、1868年、18歳の時に単身スイスに戻り彫金師の仕事に就く。1872年にアメリカの宝石商の誘いで渡米し、1875年にフィラデルフィアでヴォージュ出身の一家の娘と結婚。同年、一人息子が生まれる。当時の彼の仕事は時計ケースの彫金師であった。画家を志し、1876年から1881年までペンシルバニア美術アカデミーに登録した後、1883年にフランスに戻る。www.leondelachaux.org (2018年9月18日閲覧)。
- 2) Nadine Fattouh-Malvaud, « Le travail des femmes au XIX<sup>e</sup> siècle », *Histoire par l'image*, <http://www.histoire-image.org/etudes/travail-femmes-xixe-siecle> (2018年9月18日閲覧)。
- 3) 自由業に分類される女性の大半は教師である。Françoise Battagliola, *Histoire du travail des femmes*, Paris, 2008, pp. 25, 28.
- 4) シュヴァイツェルは、農村における女性と男性の労働の割合が45対55であることから、1891年の統計調査に基づき、農業に従事する女性の数を330万人と見積もっている。この推定と比較すると、1896年の数値は女性の農業就労人口をやや低めに算出していると考えられる。Sylvie Schweitzer, *Les femmes ont toujours travaillé : une histoire du travail des femmes aux XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, 2002, pp. 76-80.
- 5) フランスの工業化の進展が緩やかであったことは、同時期のイギリスにおいて農業就労人口がすでに10%程度であったことから理解できよう。三沢嶺郎「農業就業人口の変動における特質」、『農業総合研究』、14巻3号、1960年7月、p. 66。
- 6) 労働者家庭では、妻よりも児童を働きに出すことが好まれたので、出産後に仕事を続けていた女性も、自分の子どもが労働可能な年齢に達すると家庭に戻った。Battagliola, *op. cit.*, p. 13.
- 7) ジョーン＝W・スコット「女性労働者」、G・デュビイ、M・ペロー監修『女の歴史IV 19世紀2』藤原書店、1996年、pp. 640-642。
- 8) Schweitzer, *op. cit.*, p. 144.
- 9) Colette Avrane, *Ouvrières à domicile : Le combat pour un salaire minimum sous la Troisième République*, pp. 34-37.
- 10) スコット、前掲論文、pp. 644-645。
- 11) Battagliola, *op. cit.*, pp. 8-10.
- 12) 金属工業や炭鉱では女性は少数派であり、家庭用の金物や釘・ピンといった小物の製造や、石炭の選別・洗浄といった仕事に従事した。Battagliola, *op. cit.*, p. 12.
- 13) 現実には、使用人の職が安全であったわけではなく、雇用者や知り合い男性に弄ばれることも多かった。Battagliola, *op. cit.*, pp. 35-37.
- 14) Battagliola, *op. cit.*, p. 36.
- 15) Avrane, *op. cit.*, pp. 32-34
- 16) Avrane, *op. cit.* p. 26.
- 17) Avrane, *op. cit.*, pp. 43, 48.
- 18) スコット、前掲論文、p. 656。女性が働くことに否定的ではなかったジュール・シモンも、次のように述べている。Il est à souhaiter que les femmes travaillent dans

toutes les classes de la société ; et puisque dans les ménages pauvres, le salaire du mari suffit difficilement, ou ne suffit pas aux besoins communs, on peut se résigner à voir les femmes ajouter aux soins très-absorbants du ménage un travail industriel dont le produit serve d'appoint au salaire du chef de famille. Mais quand cette nouvelle tâche est écrasante pour elles, quand elle les éloigne de leur maison et les empêche d'accomplir le premier et le plus indispensable de leurs devoirs, quand elle est incompatible avec les bonnes mœurs, alors on ne doit plus la considérer que comme un malheur social, également funeste à la santé des femmes, au bonheur de leurs maris et à l'éducation de leurs enfants. (Jules Simon, *L'ouvrière*, Brionne, 1977(1861), pp. 14-15.) すなわち、シモンにとっても家事が女性の「最も重要な義務」であり、その義務の遂行のために女性に過重な労働をさせるべきではないと主張するのである。

- 19) Avrane, *op. cit.*, pp. 15-21, 25-27, 42.
- 20) Avrane, *op. cit.*, pp. 57-64.
- 21) Avrane, *op. cit.*, p. 47.
- 22) Myriam Tsikounas, « Le travail en atelier et en manufacture », Histoire par l'image, <http://www.histoire-image.org/fr/etudes/travail-atelier-manufacture> (2018 年 9 月 18 日閲覧).
- 23) Avrane, *op. cit.*, pp. 39-42.
- 24) Avrane, *op. cit.*, pp. 32-34.
- 25) Battagliola, *op. cit.*, p. 10.
- 26) 19 世紀から 20 世紀初頭にかけてのカレーのレース産業における男女分業の様子については <http://histopale.net/les-archives/calais/la-dentelle-de-calais/> を参照。
- 27) Elisabeth Marchessaux, Maurice Diéval, *Le temps de la broderie à Cordes* (1880-1980), 2017, Cordes-sur-ciel, pp. 42-47.
- 28) Marchessaux et Diéval, *op. cit.*, pp. 48-49.
- 29) Battagliola, *op. cit.*, pp. 39-40.
- 30) Battagliola, *op. cit.*, pp. 41-43 ; スコット, *op. cit.*, p. 654.
- 31) *Moniteur universel*, vendredi 12 mars 1841, pp. 625-626.
- 32) *Bulletin administratif de l'instruction publique*, tome 17, n°337, 1874, pp. 446-454.
- 33) ただし、1882 年 3 月 28 日法に定められた初等教育修了証書を有していれば 12 歳から働くことが認められる。
- 34) *Journal officiel*, n°298, mercredi 2 et jeudi 3 novembre 1892, pp. 5313-5316.
- 35) Battagliola, *op. cit.*, pp. 44-45.
- 36) ミシンはフランス人バルテルミ・ティモニエによって 1829 年に発明されたものの、当時、機械化による競争の強化を恐れた労働者による破壊行為に遭い、普及しなかった。19 世紀末に国内で普及したミシンは、主としてアメリカ製の改良版である。J. Meyssin, *Histoire d'une invention. La Machine à coudre. Notice sur Barthélemy Thimonnier*, 1866.
- 37) Avrane, *op. cit.*, pp. 26-27.
- 38) Avrane, *op. cit.*, pp. 69-73.